

子どもたちがハジける瞬間

大阪自然教室 代表 にしむらもとひで 西村元秀

1. 子どもの来ない自然観察会から

1970年代初め、自然保護運動の高まりのなかで、「学校教育や社会教育における自然保護教育の確立」を目指した若い活動家たちによって、自然保護教育のソフト開発と、「自然を大切に作る子どもたちを育成」する実践の場として、子どもたちを対象とした年会員制の自然観察会が兵庫・東京・大阪・京都と相次いで立ち上げられた。

大阪では、「自然を返せ！関西市民連合」という自然保護団体で活動していた20歳前後の若者たちが、1973年8月大阪北部の箕面において、「親と子の自然観察会」を企画したものの参加者はゼロ。実績もない見ず知らずのワカゾーに子どもを預ける親はいない、ということ思い知らされてのスタートだった。それから、子どもが来ない観察会が数か月続いたものの、なんとか、市民運動のなかで知り合った大阪市内の高速道路に反対していた自治会の子どもたちを核に、1974年4月から「大阪自然教室」としての年会員制度が発足した。

「俺たちが自然保護教育をうち立てるんや」と気負ったスタートだったが、1977年、「大阪自然教室」は自然保護教育の確立という当初の目的と、それまでの自然観察会というスタイルを一切捨てることにした。「自然保護運動の冬の時代」といわれるオイルショック後、それまで「自然を守れ！」と声高に叫んでいた学者や運動の先頭に立っていた大きな自然保護団体が、目の前の自然破壊から目をそらし、「自然保護の実現には百年かかる、だから、子どもたちへの教育こそが大切だ」と、教育の問題にすり替えたことへの反発だった。

現実に自然を破壊しているのは子どもたちではなく大人たちであり、大人の都合で自然を破壊しておきながら、子どもたちに対して「自然は大切、自然を守れ」はない

だろう。子どもたちには自然を楽しむ権利があり、大人たちはかつて自分たちが享受してきたように、子どもたちが自由に遊ぶことができる自然を守るのが大人の責任のはずだ。

2. 教育から共育へ

一教えることを捨て、子どもたちと共に楽しむ

それまでの方法をすべて捨てたものの、それに代わるモデルはどこにもなく、試行錯誤のなかから自分たちで作り出すしかなかった。そして、では何を指すのかもうまく表現できないもどかしさに悶々としつつも、どんな子が来てもその子の居場所があるように心がけることと、異年齢の子ども群れにこだわり、トコトン子どもたちと付き合いおうと決心した。そして、自分たちがおもしろいと思うこと、こんなことやりたかったなということを、子どもたちに一緒にやろうと提案し続けた。

それ以来、「教え育てる」という子どもたちと向き合う関係から、こんなことしていたらお父ちゃんやお母ちゃん、学校の先生が見ていたら絶対に怒られるだろうなーといった、ヤンチャな時間と空間を子どもたちと共有し、「共に育つ」ことにスタンスを移した。自然を頭で理解するのではなく、自然の楽しさを五感を通して体感して欲しいと願い、遊ぶ施設や遊具がなくても仲間たちと創意工夫して遊べばおもしろいぞと、ひたすら子どもたちと自然のなかで遊んできた。

3. 自然は子どもたちに優しく、そして、厳しい

集合場所の駅にすごい人がいても、「大阪自然教室」が遊ぶ場所には誰も来ない。ブルドーザーの一撃は自然に決定的なダメージを与えるが、子どもたちが遊ぶこと

によって与える程度のダメージに対する回復力はある。とはいえ、自然への影響を配慮して15人前後の小グループに分かれて行動している。

ヤブをかき分けながら道なき道を突き進み、草の斜面を滑り降り、源流を探検しに川をさかのぼる。サルのように木に登り、ツルでターザンをしたり、落ち葉のなかに埋められたり、出会ったグループと松ぼっくり戦争が始まったりと、自然は本当に飽きることがない。春には野草を天ぷらにして食べ、初夏にはキイチゴやグミやヤマモモを味わい、秋にはシイの実を食べアケビの種をとばし、ときには、だまされてカキの渋さを思い知らされることもあるが、とにかく食べられるものには執着している。笹舟を流して競争し、気張って草笛を鳴らし、ジャンボ鉄砲をとばし、ツルでリースを編み、小枝やクルミでペンダントを作ったりと、自然のモノを使って遊んだり工作したりするのも楽しみの一つ。そして、草の汁をつけ、葉っぱを頭にくっつけ、ドロコンコになって帰る。

昔の悪ガキからみればたいしたことではないが、頭だけで「自然を大切に！」と教えられている子どもたちの第一印象は「自然破壊教室」、こんなことしていいのかという戸惑いがみられる。最初はごちなく及び腰だった子どもたちが、まるごと受け入れてくれるリーダーたちと仲間にもまれ、服の汚れを気にしていたことなど忘れて夢中になって遊ぶ。カタかった子どもたちがハジける瞬間を見るのが、一番うれしいときである。しかし、最近子どもたちはますますカタくなってきているようで、子どもたちがほぐれるのには少し時間がかかるようになってきた。

4. 大阪自然教室の活動は

会員は4月からの年会員制をとり、対象は小学2年～中学3年、会員数は160～190名である。毎年口コミではほこの人数になるので、大々的に公募することはしていない。

「例会」としては毎月1回、大阪近郊のまだ自然の残っている場所に日帰りで行く。うち年4回は同じ箕面に出かけ、季節の違いを感じるようにしている。また、長期の休みには宿泊をとまなう「特別教室」をしている。

2001年度に実施した特別教室は、

夏休みに、*「夏の美方自然教室：貫田班」対象小学

2年～小学5年、4泊5日×4期、兵庫県美方町貫田地区の農家に泊めていただいで自然体験・田舎体験。*

「夏の美方自然教室：熱田班」対象小学5年～中学3年、24泊25日(4泊ごとに入れ替え日が設定されているので、子どもたちは自分の都合により4泊単位で申し込み)、美方町で最も山奥の熱田地区の空き家を一軒借りる。電気だけはきているものの、燃料のマキ作りから始まる自炊生活。*「祝島自然教室」対象小学4年～小学6年、5泊6日(船中1泊)、山口県上関町祝島の民家を借り、魚を漁師さんに差し入れてもらい自炊。*「四万十自然教室」対象小学6年～中学3年、5泊6日(船中2泊)、四万十川中流部西土佐村口屋内地区の公民館を借りて自炊。

冬休みには、*「元氣村自然教室」対象は小学2年～6年、2泊3日、NPO法人「自然と緑」が管理している国有林で間伐作業をしたり、冬の星の観察を行う。小規模の宿泊施設を借りて自炊。*「不自由教室」対象は中学生、2泊3日。行動計画、食事計画をすべて自分たちで自由に立てて実行する。ただし、氷点下になる山中でのテント生活、トイレもなく、沢の水を利用。リーダーは不親切な同行者。自由であることは不自由であることを知る。

春休みには、*「春の美方自然教室」対象小学2年～小学6年、夏と同じ美方町貫田地区の農家に分宿。*「ぶらり旅」対象小学6年～中学3年。若いリーダー2、3人と子ども5～7人が一班を編制し、かつてのカニ族のように炊事道具とテントを担いで、安いフェリーや「青春18切符」を使ったお金をかけない旅。事前に大阪で下調べはするものの下見はせず、行った旅先での人との出会いやハプニングを楽しみながらゆっくり旅を続ける。初心者向けは5泊6日(現地3泊、船中2泊)、経験者向けは6泊7日(現地4泊、船中2泊)が複数企画される。ときには、一週間ずっと歩き通す企画もある。

特別教室では、野外活動センターや少年の家など、設備の整った既存の施設は利用せず、自然の豊かな所＝過疎地に住むおじさんおばさんの懐に飛び込んでいった。農作業や山仕事などの生産活動をしている横におじゃまし、おじさんおばさんたちにかまってもらいながら長年同じ場所で継続してきた。

また、特別教室では、自分たちの命を支える農業や林業や漁業などの、第一次産業にトコトンこだわって企画

を立てた。現在停止中であるが、大阪近郊で有機農業をしている知り合いの農場などにでかけ、すべてお膳立てして子どもたちにいいとこどりをさせるのではなく、年間を通した米作りをして田んぼの泥と椀闘したり、家畜のクソまみれになって働いたり、ニワトリの解体もしていた。

毎月発行している機関紙「みどりのしんぶん」には参加した子どもたちの報告を中心に、その季節の自然観察のポイントやリーダーの想いを掲載している。作文にはリーダーのイラストをつけ、すべて手書きしたB5版12～24ページの「みどりのしんぶん」は今年の3月で326号になる。

5. 群れで育つ子どもたち

こうした企画のなかで「大阪自然教室」の骨格を形成してきたのは、スタンスを切りかえたものの、次の方向を求めてもがき苦しんでいた1977年から取り組んでいる「夏の美方自然教室：熱田班」でのすさまじい協働生活だった。

バスの終点から2時間あまり歩く「熱田」での生活は、屋根があり電気はきているものの、自分だけの空間などない雑魚寝の寝袋生活。燃料のマキ作りから始まり、自分たちの排泄物のくみ取りまで、何から何まで自分たちの手でやらなくてはならない。皆で協力してやるべきことをさっさとすませないと、食事を作ることだけで1日が終わりがねない。

しかし、子どもたちは実によく働く。よく働くので、分ける仕事なくなり失業者が発生してしまう。おそらく、子どもたちにも1日の生活の流れが理解でき、やらねばならない仕事が認識されているからであり、また、自分のやった仕事が「熱田」の生活に役に立っているという充実感からだろう。もう一つ仲間存在も大きい。

小学生高学年はゴマメ（みそっかす）の存在、経験を積んだ中学生が先頭に立ち、リーダーの自覚を持った高校生が兄貴・姉貴分として世話を焼き、大学生や若い社会人のリーダーが全体を切り盛りし、ときに中年のリーダーがこれにからむ。こうした異年齢の大きな集団のなかに、初めて参加した子どもたちは、年上の集団に仲間入りしたことへの緊張感を持ち、背伸びして張り切ってはみるものの、体力はないし、戦力にはならない。いつの間にか、仕事をほったらかして遊んでいる。しかし、

ゴマメであることが大目に見られ、そのうちに火の番ができた、オノでマキが割れたとほめられ、次第に役割を果たしながら仲間たちに認められ、信頼されていく。

また、ごった煮のすさまじい生活が長期間にわたるので、自分の地の部分がさらけ出してしまう。そのことから、こいつはこんな奴や、とありのままの自分を受け入れてもらうと同時に、仲間たちとの折り合いをつける術も学んでいく。こんな生活を通して仲間意識が生まれ、ようやく「大阪自然教室」での子ども同士の横の関係ができてくる。群れで遊ぶことになれていない現代の子どもたちは時間がかかる。

自然体験や遊び体験の欠落がもたらす弊害がいろいろいわれているが、現代では別にそれらの体験がなくても生きていけるし、根本的には自然体験や遊び体験は無駄なことかもしれない。しかし、現代社会が効率だけを追い求め、役に立つか立たないかだけの二分法で無駄を一切切り捨ててきたが故に、子どもたちの問題が噴出していると思う。日々の生活や人生に無駄なものが許される余裕を持ちたい。

とはいうものの、自然体験が本当に子どもたちの血となり肉となるには三つのことが必要だと思う。一つ目は、その経験が「日常」であること。しかし、現在では「日常」であることはむずかしく、せめて体験をフィードバックしながら「継続」して長年にわたって体験すること。二つ目は、独自の文化を持つ、異年齢の子どもの「群れ」の存在。子どもの群れのなかで、仲間と共に体験すること。三つ目は、体験の「伝承」。体験してきたことを年下の子どもたちに伝える。特に、伝えることによって、その子の自然体験がはじめて完結する。

現在、文部科学省は子どもたちが自然体験する場の拡大に力を注いでいる。それを推進されている方が、なぜか自然体験の感動は長続きしないんですよ、と話されていたが、それはただ自然の知識を教えることや、とってつけたような一過性の体験プログラムで終わっているからだと思う。

6. 子どもたちの居場所としての若衆宿

子どもたちの居場所としての子どもの群れにこだわり続けてきた「大阪自然教室」では、現代の若衆宿（わかしゅうやど）を意識して運営してきた。かつての子ども

たちが、異年齢の子どもの群れに最初はゴマメとして加わり、仲間たちにもまれながら年齢に応じた通過儀礼を経て成長してきたように、企画は年齢や経験に応じてチャレンジするようにハードルを設定してきた。

特に力を入れてきたのは、受験やクラブで忙しくなって参加者が集まりにくい中学生を対象に、小規模の企画を赤字覚悟で、これでもかこれでもかと意地になってやり続けた。その結果、会員時代を終わった高校生たちが、今度はリーダーとなって小さな子たちの面倒をみるのが続いている。ここ十数年、中心になって活動しているリーダーの7、8割を会員から大きくなった者たちが占めてきた（阪神大震災以後、学生や社会人がリーダーとして飛び込んでくる例がまた増えてきている）。

現在、中学生や高校生たちはキレる世代とか、何を考えているかわからないなどと言われる。しかし、子どもは大人社会を映すカガミ、問題が彼らだけにあるわけではない。中学生や高校生たちは、目立とうとする少数の者もいるが、多くは周りの評価を気にして常に緊張を強いられ、自分を極力出さずに身を縮めて、良い子を演じ続けている。しかし、良い子でいることに疲れて自分のなかに閉じこもるか、孤立することを恐れて少数の同学年の友だち関係に固執している。

ここ数年、「熱田班」を24泊25日間に拡大するなど、前にも増して中学生の企画に力を入れている。それまでは小学6年生で会員数がグッと減って中学1年生でさらにガタッと落ち込んでいたのが、継続率もよく中学生の会員数は以前の2、3倍。企画への参加はとでも多く、これまでの小規模な企画では、さばききれない。時間をかけてつきあえばつきあうほど、グッと強い手応えを感じている。

現在、「大阪自然教室」では中学生、それも、女の子たちが盛り上がっている。また、小学生の低学年からの会員よりも、小学校の高学年や中学生で会員になり参加して「大阪自然教室」にハマった子どものほうが熱心である。息苦しいと感じている思春期の子どものほうが、「大阪自然教室」の心がけてきたことを敏感に受け止め、ここは安心して自分をさらけ出しても良い、ホッとできる自分の居場所と思っていてくれるからだろう。

「大阪自然教室」が子どもの群れとして、もう一つ心がけてきたことは、小さい子どもが自分もなりたいたと憧

れる年上の存在、成長のモデルを持つことであった。スポーツや音楽などのクラブでは、抜きんでた才能がある者しか憧れの対象になれないから、そこでは上級生だからというだけで、理不尽な行為がまかり通っている。今の若者の組織でまがりなりにも成長のモデルを持っているのは、感心はしないが暴走族だけかもしれない。

「大阪自然教室」において高校生リーダーたちの占める位置は重要で、彼らの存在なしには成立しない。高校生たちも一人前のリーダーとして認められ、「大阪自然教室」の唯一の決定機関である毎週木曜日のリーダー会議にも出席して運営に参画している。会員の子どもたちは大きくなるにしたがい、より年の近いリーダーの存在を強く意識するようになっていくが、中学生たちにとっては高校生リーダーたちが気になるようだ。リーダーとしてはまだ駆け出しでベテランのリーダーたちに怒られながらも、責任ある仕事を任されて懸命に働いている姿に、中学生たちは、去年まで自分と一緒にワイワイやっていた仲間だった高校生たちが、急に大きな存在に感じられ、まばゆく映るようだ。

「大阪自然教室」は発足以来一貫してどこからの援助も受けず、リーダーの自主的・自発的・自立的な活動として、その時々に参加しているリーダーの自己責任において運営されてきた。最低限の費用は保護者に負担してもらうものの、これまであえて専従も置かず、すべてリーダーの手弁当でやってきた。

「大阪自然教室」と同じように自然体験や遊び体験を子どもたちに提供する団体がたくさん設立されるものの、やがて活動が停滞したり、活動をやめてしまう団体が多いなかで、なお現在も持続する大きなエネルギーを持ち続け、なんとか30周年を迎えることができそうである。

キーワード：若衆宿(または、若者宿:わかものやど)

かつて、集落には若者たちが生活を共にして寝泊まりする特定の家が設けられ、そこで地域社会に必要な作業とか祭りの準備とか伝統芸能を継承するなどして、地域社会に参画していた。若衆宿に加わってもらうことは子ども時代の終わりを意味し、そこでの活動を通して一人前として認められ、やがて、地域社会に巣立っていった。現在、思春期の子どもたちの居場所づくりが求められているが、大人が過度に保護や干渉するのではなく、かつての若衆宿が持っていた機能や役割を持てたらと思う。